

第41回 SGRA フォーラム in 蓼科

## 東アジア共同体の現状と展望

プログラム

日時：2011年7月2日（土）10:00～17:30

会場：東京商工会議所蓼科フォーラム研修室 A

（長野県茅野市豊平チェルトの森）

主催：国際フォーラム「東アジア共同体の現状と展望」実行委員会  
共催：渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA：セグラ）  
助成：鹿島学術振興財団  
協力：東京商工会議所

### フォーラムの趣旨

SGRA「東アジアの安全保障と世界平和」研究チームが担当するフォーラム。

日本において民主党政権が誕生し、鳩山首相が東アジア共同体構想を提唱したことによって、この構想をめぐる論議が活発化した。すでに、ヨーロッパでは経済と社会文化、ひいては政治と安全保障の面において個別の国民国家の枠を超えた共同体作りの実験が成果をあげている。日本も2002年に当時の小泉首相が東アジア・コミュニティー構想を打ち出したが、中国との思惑の差が露呈するなど、この地域で日本が主導する東アジア共同体作りの流れが定着しているとはいえない状況である。

しかし、中国がその方向に向け強力なドライブをかけようとしている中、日本としても共同体構想が単発で終わってしまう選択肢ではないことも確かなように思われる。その意味で、東アジアの範囲で共同体を構築しようとする試みは、その現実的可能性如何に係わらず、政権交代後における日本の外交政策の展開や東アジア国際関係の流れを把握する上で、もっとも注目すべきものである。しかし、東アジア共同体の実現のためには、この地域に存在する個別国家の現実と相互協力の制度化のレベルなど、克服すべき障壁も多々である。

本フォーラムにおいては、この地域の諸国が提唱している様々な東アジア共同体論を引き出し、その共通項をまとめ、そのような構想が政策や制度として定着するためにはどのような課題に取り組むべきかについて、日本、東南アジア、韓国、中国、香港、台湾、モンゴル、そして北朝鮮の視点から点検してみたい。

10:00-10:10

総合司会：李 恩民（桜美林大学リベラルアーツ学群教授）  
開 会：今西淳子(SGRA)

<p>10:10-10:40 【基調講演 1】</p>	<p style="text-align: center;"><b>東アジア共同体形成における「非伝統的安全保障」</b></p> <p style="text-align: center;">恒川恵市（政策研究大学院大学副学長）</p> <p>「東アジア共同体」実現が真剣に語られ始めてから 10 年以上経つが、経済関係面を除けば制度化にはほとんど進展がない。それは、経済統合が各国の利己主義（欲）を満たすのに対して、国家安全保障上の統合による軍事的主権の放棄が自国の利益になると感じる国は少ないからである。日本も、安全保障に関する限り、日米同盟を離れることは考えられない。各国に軍事的自制を迫るには、強い共同体意識が必要である。そうした共同体意識を醸成するためには、主権のプールという点で経済問題と国家安全保障問題の中間に位置する「非伝統的安全保障」問題における協力を積み重ねることが、現実的な道である。それは大気・海洋汚染、越境犯罪、感染症といった、脅威の発生と波及が国境を越えて起こる問題の解決には、近隣国家間の協力が不可欠であり、その解決が多くの国の利益にもなるからである。</p>
<p>10:40-11:10 【基調講演 2】</p>	<p style="text-align: center;"><b>ASEAN と東アジア共同体</b></p> <p style="text-align: center;">黒柳米司（大東文化大学法学部教授）</p> <p>一見逆説的ながら、「東アジア共同体」構想の周辺で「ASEAN+3」「東アジア首脳会議」「日中間3国協議」など少なからぬ定期協議が展開されてきたが、これによって「東アジア共同体」の具体的イメージが描き出されたとはいいいがたい。というのは、これらの重層的対話は、それぞれ独自のベクトルをもって運営されており、「東アジア共同体」に向けて収斂する契機に乏しいからである。極論すれば、かろうじて共通項とみなしうるのは、「東アジア共同体」構築が望ましい目標であること、そして、ASEAN がこれら地域主義の「運転席に座る」という原則的合意のみであった。弱者の連合体に過ぎない ASEAN が、東アジアにおける地域秩序形成の「推進源」たりえたのは何故か、そのことが「東アジア共同体」構想にどのような運命を与えてきたか、そして「東アジア共同体」構想の低迷を打破するために ASEAN は何をなすべきかという一連の疑問への回答が今こそ求められている。</p>
<p>11:10-11:30</p>	<p style="text-align: center;">休憩</p>
<p>11:30-11:50 【発表 1】</p>	<p style="text-align: center;"><b>韓国と東アジア共同体</b></p> <p style="text-align: center;">朴 栄濬（韓国国防大学校安全保障大学院副教授）</p>

	<p>韓国は 1948 年の政府樹立以来、東アジア及び太平洋地域における共同体建設に国家的な関心を注いできた。李承晩大統領は、アメリカ、台湾、フィリピンなどを含む太平洋同盟の構成を推進した。朴正熙大統領も、アジア太平洋地域における国家間経済協力の共同社会建設を目指して、1965 年に日本、台湾、フィリピン、オーストラリア、ニュージーランドなどを含む ASPAC を結成するに至った。しかしこれらの試みは、反共産主義という理念的な限界を帯びていた。理念的な障壁も越えた東アジア地域の多者間地域協力体に韓国が参加したのは、冷戦体制解体以後の 1990 年代になってからである。この研究では、アジア太平洋地域において決して強大国ではない韓国が共同体秩序の構築に国家的に取り組んできた成り行きとその理由を検討する。</p>
<p>11:50-12:20 【発表 2】</p>	<p style="text-align: center;"><b>中国の外交戦略と「東アジア共同体」</b></p> <p style="text-align: center;">劉 傑（早稲田大学社会科学部教授）</p> <p>東アジア共同体は「友愛外交」と並んで、鳩山内閣が世界に送った強力なメッセージであった。「和諧世界」や「睦隣・安隣・富隣」を唱える中国の外交姿勢と重なる部分もあり、中国でも東アジアの一体化に向けての議論が活発化している。日本の議論が萎んだ現在、中国はどのような東アジア国際関係像を描いているのだろうか。大国外交の形を作り上げてきた中国は、東アジアの地域一体化に向けて検討する一方、対米関係を主軸に世界戦略を構築している。「アメリカか中国か」という選択の中で揺れ動いている日本と対照的に、「世界と中国」という積極的な中国の外交姿勢が、東アジア共同体構想にどのような影響を及ぼすのか。活発な中国外交の実態と研究者の意見を交えながら考えてみたい。</p>
<p>12:20-14:00</p>	<p style="text-align: center;">昼 食</p>
<p>14:00-14:30 【発表 3】</p>	<p style="text-align: center;"><b>台湾・香港抜きの「東アジア共同体」は成立するのか？</b> ～脱「中心」主義で安定した共同体を～</p> <p style="text-align: center;">林 泉忠（琉球大学法文学部准教授）</p> <p>鳩山・東アジア共同体、ASEAN+、そして TPP が異なった流れで乱立する中、東アジアの地域統合はどのような方向に進むのか？これまでの構想や動きは「中心」主義、大国主義、主権国家主義の傾向が強く、「周辺」に位置付けられてきた台湾や香港が無視された状況にある。しかし、アジアの経済や安全保障を語るには決して軽視できない存在である台湾・香港抜きの「東アジア共同体」が果たして成立できるのか？これまでの構想・議論は、欧州連合の進展を強く意識しているはずだが、欧州連合が実現している国境の希薄化や一部の主権の棚上げといったポスト近代国家の開放性が欠如しているのではないか。本報告は、今までの東アジア共同体の動きに見られるゲームパワーの体質や大国の思惑を分析し、真の共同体に不可欠な開放主義や脱主権主義を直ちに取り入れ、台湾や香港も参加できるような開かれた共同体を構築する必要性を指摘する。</p>

<p>14:30-14:50 【発表 4】</p>	<p style="text-align: center;"><b>モンゴルと東アジア共同体</b> ～資源開発とモンゴルの安全保障～</p> <p style="text-align: center;">ブレンサイン（滋賀県立大学人間文化学部准教授）</p> <p>人口が少なく広大な国土面積を持つ内陸国家モンゴルは、大国中国とロシアに挟まれ、両国の緩衝地帯として存立し今日に至っている。社会主義時代の閉鎖的な状況が長く続いたこともあってモンゴル国は、東アジアはもとより、世界的に見ても資源開発においてはまた処女地といえる。特に民主化移行後のモンゴルは、世界第二の経済大国となった中国と隣接する国として、その豊富な地下資源開発の行方が世界中の注目を浴びている。資源開発を如何に戦略的に行えるかは弱小国家モンゴルの今後の行方を左右する重要な課題であるのみならず、急成長する東アジア全体を巻き込んだダイナミックな課題にもなりうるであろう。本報告では、主として中国のエネルギー戦略と関連させながらモンゴル国をめぐる資源開発の歴史的経緯と現状について議論したい。</p>
<p>14:50-15:10 【発表 5】</p>	<p style="text-align: center;"><b>北朝鮮と東アジア共同体</b> ～北朝鮮とどのように付き合うのか～</p> <p style="text-align: center;">李 成日（韓国東西大学校国際学部助教授）</p> <p>今日、北朝鮮の核問題は、朝鮮半島のみならず、北東アジア地域諸国の外交および安保における最も重要な課題になっている。にもかかわらず、北朝鮮の核問題を平和的に解決しようとしてきた六者協議も 2008 年 12 月に中断されたまま、今まで再開されていない。21 世紀に入ってから、東アジア共同体に関するさまざまな議論が活発に行なわれているが、北朝鮮に対する取り扱いは非常に少ない。北朝鮮は ARF 以外に、APEC、ASEAN+3、EAS など東アジア地域の地域協力機構にはまだ加盟していないし、南北関係の改善、ひいては日朝関係、米朝関係もいまだに国交正常化を実現していない。本報告は、この地域において唯一孤立している北朝鮮とどのように付き合っ、東アジア共同体の構築においてどのように協力し合うべきかを議論したい。</p>
<p>15:10-15:40</p>	<p style="text-align: center;">休 憩</p>
<p>15:40-17:20 パネル ディスカッション</p>	<p style="text-align: center;">パネルディスカッション <b>東アジア共同体の現状と展望</b></p> <p style="text-align: center;">進 行：南 基正（ソウル大学日本研究所 HK 教授） パネリスト：上記講演者</p>
<p>17:20-17:30</p>	<p>閉会の辞： 嶋津忠廣（SGRA 運営委員長）</p>

## 講師略歴

### ■ 恒川恵市（つねかわ・けいいち☆TSUNEKAWA Keiichi）

1981 東京大学教養学部助教授、1991 同教授、2008 JICA 研究所所長、2011 政策研究大学院大学副学長。主な研究分野・関心領域は東アジアと中南米の比較政治経済および地域統合。最近の著作に、“Why so many maps there? Japan and regional cooperation,” in T. J. Pempel (ed.) *Remapping East Asia: the construction of a region*, Cornell Univ. Press, 2005; “Building Asian security institutions under the triple shocks,” in V. Aggarwal & M.G. Koo, (eds.) *Asia's new institutional architecture: evolving structures for managing trade, financial, and security relations*, Springer, 2007; “Nature of democratic commitment in Asia,” (coauthored with H. Washida) *Political Science in Asia* 2(2), 2007; “Old Japan, New Japan: Explaining the Changing Nature of Japan's Political Economy,” *Political Science in Asia* (2008).

### ■ 黒柳米司（くろやなぎ・よねじ☆KUROYANAGI Yoneji）

（財）日本国際問題研究所研究員、東洋英和女学院短大教授をへて、現在、大東文化大学法学部教授。67歳。専攻分野は東南アジア政治・安全保障、とりわけ ASEAN 研究。主要業績に『ASEAN35年の軌跡』（有信堂、1993）、編著『アジア地域秩序と ASEAN の挑戦』（明石書店、1995）、編著『ASEAN 再活性化の課題』（明石書店、2011）など。

### ■ 朴 榮濬（パク・ヨンジュン☆PARK Young-June）

韓国国防大学校安保大学院教授。専門は日本政治外交、東アジアの国際関係、国際安全保障論。2002年、東京大学総合文化研究科で博士号を取得。韓国に帰国してから韓国国家安全保障会議の政策諮問委員、韓日新時代共同委員会の韓国側委員、韓国国際政治学会の安全保障・国防研究委員会の委員長などを歴任。2010-11年度ハーバード大学の US-Japan Program の訪問研究員。主要著書に『東アジア安全保障共同体』（2006、共著）『第3の日本』（2008）、『安全保障の国際政治学』（2010、共著）、『日本と東アジア』（2011、共著）など。

### ■ 劉 傑（りゅう・けつ☆Liu Jie）

早稲田大学社会科学総合学術院教授、博士（文学）。専門は近代日本政治外交史、近代日中関係史、現代日中関係論。北京外国語大学を経て、1982年に来日。1993年東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了。1996年4月より早稲田大学社会科学部に勤務。コロンビア大学客員研究員、朝日新聞アジアネットワーク客員研究員などを歴任。著書に『日中戦争下の外交』（吉川弘文館、1995年）、『中国人の歴史観』（文藝春秋 文春新書、1999年）、『漢奸裁判—対日協力者を襲った運命』（中央公論新社 中公新書、2000年）、共著に『国境を越える歴史認識』（東京大学出版会、2006年）、『新華僑老華僑』（文春新書、2008年）『1945年の歴史認識』（東京大学出版会、2009年）など。

### ■ 林 泉忠（リム・チュアンティオン☆LIM John Chuan-tiong）

琉球大学法文学部政治・国際関係専攻准教授、2002年東京大学法学政治学研究科博士課程修了（法学博士）、琉球大学法文学部専任講師、同助教授（2004年）、准教授（2007年）、2008年-2010年ハーバード大学・フェアバンク中国研究センター・フルブライト客員研究員、2010年国立台湾大学人文社会高等研究院客員研究員。主要著書に、『「辺境東アジア」のアイデンティティ・ポリティクス：沖縄・台湾・香港』（単著、明石書店、2005年）、『現代アジア研究 第2巻：市民社会』（共著、慶應義塾大学出版会、2008年）、『グローバル・ディアスポラ 第1巻：東アジア』（共著、明石書店、2011年）、『コンタクトゾーンと

しての島嶼における文化現象：沖縄と東アジア・太平洋島嶼地域』（共著、彩流社、2010年）、『やわらかい南の学と思想：琉球大学の知への誘い』（共著、沖縄タイムス出版社、2008年）、『時代變局與海外華人的族國認同』（共著、中華民國海外華人研究學會、2005年）

## ■ ボルジギン・ブレンサイン (BORJIGIN Burensain)

2001年、早稲田大学大学院文学研究科 文学博士学位取得。日本学術振興会外国人特別研究員、東京経済大学非常勤講師、中央大学非常勤講師、早稲田大学非常勤講師などを経て、2006年より滋賀県立大学人間文化学部准教授。主要業績に『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』（東京；風間書房、2003年）、「九世バンチェン＝エルデニの東部内モンゴル歴訪と奉天当局の対応－モンゴル、チベット、中国三者関係の構造をめぐる事例研究として－」（『日本モンゴル学会紀要』31、2001年）『境界に生きるモンゴル世界－二十世紀における民族と国家－』（共著）東京；八月書館、2009年など。

## ■ 李 成日 (リ・チェンル☆LI Chengri)

2008年 慶應義塾大学大学院法学研究科 法学博士学位取得。慶應義塾大学法学部訪問研究員、韓国東西大学招聘講師、専任講師などを経て2011年韓国東西大学国際学部助教授。主要業績に『中国の朝鮮半島政策－独立自主外交と中韓国交正常化』、慶應義塾大学出版会、2010年10月、「中国の朝鮮半島政策と中韓関係－中韓の『戦略的協力パートナーシップ』の意味を中心に」、慶應義塾大学法学研究会編『法学研究』、第83巻12号(2010年12月)。

### SGRAとは

SGRAは、世界各国から渡日し長い留学生活を経て日本の大学院から博士号を取得した知日派外国人研究者が中心となって、個人や組織がグローバル化にたちむかうための方針や戦略をたてる時に役立つような研究、問題解決の提言を行い、その成果をフォーラム、レポート、ホームページ等の方法で、広く社会に発信しています。研究テーマごとに、多分野多国籍の研究者が研究チームを編成し、広汎な知恵とネットワークを結集して、多面的なデータから分析・考察して研究を行います。SGRAは、ある一定の専門家ではなく、広く社会全般を対象に、幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動を狙いとしています。良き地球市民の実現に貢献することがSGRAの基本的な目標です。詳細はホームページ ([www.aisf.or.jp/sgra/](http://www.aisf.or.jp/sgra/)) をご覧ください。

### SGRAかわらばん無料購読のお誘い

SGRAフォーラム等のお知らせと、世界各地からのSGRA会員のエッセイを、毎週水曜日に電子メールで配信しています。SGRAかわらばんは、どなたにも無料でご購読いただけます。購読ご希望の方は、ホームページから自動登録していただけます。